

キュービッド便り

二〇一八年三月号

訃報のお知らせ

葬儀施行会社として、改めて故人のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 合掌

有限会社 屋久島葬祭
☎42-2941

故母岡元正子儀二月四日七十一歳の生涯を
とじました。

なお、葬儀は(浦)屋久島葬祭斎場ブルマーヂュにて執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせいたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町船行一〇四三一八〇

- 喪主 岡 元 和 之
- 長男 岡 元 純 子
- 長女 鎌 田 智 美
- 長女 鎌 田 忠 明
- 孫 岡 元 和 也
- 孫 岡 元 綾
- 孫 岡 元 花
- 孫 岡 元 星
- 孫 鎌 田 美 流
- 孫 鎌 田 美 神
- 孫 鎌 田 心
- 外親族 一同

故妻渡邊夕二子儀二月六日八十二歳の生涯
をとじました。

なお、葬儀は(浦)屋久島葬祭 やすらぎの家
くりおの里にて執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町栗生一五三六番地

- 喪主 渡 邊 益 男
- 長男 渡 邊 岳 夫
- 長男 渡 邊 雅 美
- 長男 渡 邊 浩 二
- 二男 渡 邊 心 晴
- 孫 渡 邊 心 晴
- 外親族 一同

故兄横山廣一儀二月五日八十五歳の生涯
をとじました。

なお、葬儀は小瀬田光照寺にて執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町小瀬田一三六〇一四八

- 喪主 菅 原 みさ子
- 外親族 一同

故義弟図師光二儀二月七日八十五歳の生涯
をとじました。

なお、葬儀は(浦)屋久島葬祭斎場ブルマーヂュ
にて執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町安房一一番地四

- 喪主 図 師 佐 夜 子
- 外親族 一同

故夫塚田義高儀二月十七日八十四歳の生涯
をとじました。

なお、葬儀は(浦)屋久島葬祭斎場楽養送にて
執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦三四八一二

- 喪主 塚 田 ミ キ
- 長男 塚 田 高 志
- 長男 塚 田 多 美 子
- 長女 塚 田 さ ゆ り
- 長女 塚 田 孝 一 郎
- 外親族 一同

故母寺田ミエ儀二月十七日八十九歳の生涯
をとじました。

なお、葬儀は(浦)屋久島葬祭斎場楽養送別館
にて執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町一漆三六八番地

- 喪主 寺 田 道 信
- 二男 寺 田 幹 哉
- 長女 松 田 た か 子
- 二女 馬 場 和 子
- 外親族 一同

故夫橋之口利男儀二月二十四日八十九歳の
生涯をとじました。

なお、葬儀は(浦)屋久島葬祭斎場ブルマーヂュ
にて執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町安房五四〇番地一二九

- 喪主 橋 之 口 紀 江
- 長男 橋 之 口 昭 弘
- 二男 橋 之 口 文 男
- 長女 中 野 あ さ み
- 外親族 一同

故夫眞邊則義儀二月二十七日八十七歳の
生涯をとじました。

なお、葬儀は(浦)屋久島葬祭斎場さくらにて
執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦二四五〇番地二一六

- 喪主 眞 邊 キ ヌ
- 長男 眞 邊 正 徳
- 二男 眞 邊 博 昭
- 二男 眞 邊 祐 子
- 三男 眞 邊 正 博
- 四男 眞 邊 信 一
- 四男 眞 邊 恵 美 子
- 外親族 一同

故夫日高勝利儀二月二十二日七十六歳の
生涯をとじました。

なお、葬儀は(斎)場アムール屋久島にて
執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦二四七二番地四二

- 喪主 日 高 チ ア 子
- 長男 日 高 敏 郎
- 長男 日 高 志 津 香
- 長女 日 高 由 美 子
- 外親族 一同

株式会社 アムール屋久島

故夫坂本武志儀二月十七日八十八歳の
生涯をとじました。

なお、葬儀は自宅にて執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町小島二〇九番地一七

- 喪主 坂 本 法 子
- 長男 坂 本 武 久
- 長男 坂 本 黄 烈
- 長女 佐 々 木 俊 明
- 長女 佐 々 木 かつ 子
- 二男 坂 本 謙 司
- 二男 坂 本 里 美
- 外親族 一同

故兄種田和彦儀二月十八日八十一歳の生涯
をとじました。

なお、葬儀は(浦)屋久島葬祭 やすらぎの家
ひらうち里にて執り行いました。
ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでお知らせ
いたします。

鹿児島県熊毛郡屋久島町平内四七二番地五

- 喪主 種 田 義 和
- 姉 久 保 田 茂 子
- 姉 種 田 節 子
- 姉 種 田 里 子
- 妹 種 田 明 雄
- 義弟 種 田 義 和
- 弟 種 田 義 和
- 弟 種 田 義 和
- 弟 種 田 義 和
- 義妹 種 田 義 和
- 妹 種 田 義 和
- 義弟 種 田 義 和
- 妹 種 田 義 和
- 弟 種 田 義 和
- 外親族 一同

二月一日以降葬儀施行の御葬家様分です。
誤字・脱字等ございましたらご容赦下さいませ。

ひつろいじと第3部

発行

ひとりごとを書き始めて10年。

たくさんの人と出会い、そして、別れがありました。

その度に、命の尊さ、生きている意味を考える。

でも、何度心を感じても、生活の流れで忘れてしまう。

私は47歳、長男は生花店、次男は葬儀屋、三男は飲食店で働き、四男は設計士になる目標を持ち、みんな一日一日を頑張っています。

父は足腰が痛いながらも畑に出かけ、母は店に来てはできることを手伝ってくれます。

二人とも、家族、従業員の事を気にかけてくれます。

みんな、今、自分にできることをする。

そんな中に、第三部を発刊することになりました。

山野生花、オズ店頭に

置いてありますので

よかつたらもらって

ください。

ひつろいじ

3月、お別れシーズン突入。

この一カ月間、送る人、送られる人、いろんな思いの中、たくさん別れ、旅立ちが訪れる。

うちの二男も東京の花屋に就職して早四年を迎えた。給料はあまり変わらない状況の中、仕事量だけが増え、忙しい毎日を送っていた。

そんな二男が三月から、鹿児島島の葬儀社に入社した。こんな息子の一步を見てみると、自分の歩んできた人生と重なることがあり、ふと、あの時の自分が今の息子なんだなと思ひ、ふと昔の事を思い出した。

私は、高卒後、千葉の葬儀社下請けの生花店に就職し、5年のちに鹿児島島の葬儀社に1年勉強のあと、帰郷し跡を継いだ。

世の中はちょうどバブル期だったんだらうけど、低所得で休日は月4日、朝から夜遅くまで働いていた自分にとっては何も関係なかった。

勤めていた会社は、昼、夜の食事は提供され、私の場合、高卒で鹿児島島から就職だったので、社長宅のすぐ近くのアパートに住み、朝食は社長宅で食べさせてもらっていた。

さらに家賃4万に対し2万会社が負担してくれたので、ほぼ不自由のない生活をさせてもらった。

こんな高待遇の生活だったのだが、問題もあった。アパートは隣に大家が住んでいたため、友達に来て騒いだりするとすぐ壁を「ドンドン」と叩かれる日もあった。

洗濯機は当初買うお金もなくて、夜遅くに近くのコインランドリーに出かけていた。

そんな、誰も知らない一人暮らしの時、初めて料理を作ってみようと思った。

今まで包丁すら持ったことなく、正直ご飯を炊いたことのない、今時の日本男児にしては貴重な存在。

そんな俺が初めて料理に挑んだのが、なぜか鶏の唐揚げ。最寄りのスーパーでパックに入った手羽元を買い、油を買って家へ。

ほんと、したことないので、適当に油を注ぎ、肉をそのまま投入。

「お、調子いいぞ」としばらく見ていると、肉の間から血が流れ出てきた。

もう、その状況を見た瞬間「もう無理」と思い、調理をやめた。それからというもの、現在まで台所に立つことはなくアイラブ コンビニ

「誰だろう」と出ずにいると「山野さんーお父さんが忙しいから出てこいってー山野さんー」

そう、社長の小学生の息子が呼びに来たのだ。そして、会社に行くトラックは積み込みOK

あとは出発できる状態になっており、社長の笑顔とともに「正ちゃん、どうせ暇だろう。〇〇に行ってきた」と、逆らえない言葉。

忙しい時、既婚者の従業員は呼ばず一番呼びやすい独身の俺が呼ばれる結果。

この休みは振り替えられることなく、疲労だけは蓄積された。

それから一年後、ローンで車を買った、休みの前日、忙しいことが分かっていたので、休日朝早くから東京の豊島園に遊びに出かけた。

東京まで行けば呼ばないだろうと休日を満喫していると、ポケットの中で鳴るベルの音。

元氣よく「ハイ、山野です。今、豊島園です」と連絡すると、「じゃあそのまま江戸川の〇〇に行ってください。こつちから荷物を持って行くからさ。じゃあ、たのむねー」

何と驚く社長の一言。

「え、まじ、俺、今、遊園地で遊んでいるのに、えー仕事ーまじでー」

と思う、東京まで逃げた俺を電話一本で呼び戻す社長の一声。

ほんと、今となつては忘れられない一日となった。それからというもの、遊園地はもつと遠い山梨県の富士急ハイランドに行くことになった。

よく先輩達に呑みに連れて行ってもらった。名前は「ル・モンド」というスナックで、いつものように先輩方のおはこの歌を歌い、果物盛りを頼み、合間に「呑め」「呑め」と言われるがまま呑み、結果、トイレでつぶれる始末。ふと寒さで目を覚ますと、店の外の側溝の横に放置され、先輩達は閉店まで楽しんでいて。次の日、案の定、二日酔いになり、げっそりしている、倉庫の奥で花環と一緒に寝かしてもらった。

また、ある日はナンバに出かけた。当然、助手席なので声をかけるのは自分の役割。勇気をふりしぼり声をかける。

「何してるのー」

次の瞬間、その女性達に「何そのイントネーション」と笑われた。俺の発音、鹿児島弁なんです。今で言う「公務員」と同じ発音。当然、笑われるだけでつれるはずもなく、金もない、車もない、そして発音変、成功しない3原則みたいなものだった。

長は「屋久島に焼肉屋あんのか」「こんな肉食ったことないだろう」と俺をつまみにビールを飲み笑顔。ちくしょう、こうなつたら食べてやる、と思ひ食べだすと、「おい、ガツガツ食うんじゃねー味わつて食べろー」と言われた。

仕方なく、隣の楽しそうなテーブルを横目に少しずつ食べていると、「んーどうしたー食欲ないのかー」との言葉に「ガツガツ食うなつていうから食べれないんだらう」とお腹からの叫び。

結局、みんなは満腹の笑顔に、俺は目の前に肉はあるけど食べれない、苦しい時間を過ごした。

そして社長、会計後、

「みんな、二次会はコスタリカに行くぞ」と社長宅近くの行きつけの飲み屋に号令がかかる。

俺の家は社長宅近くなので、駐車場からお供のように二次会へ。それから、何分経つても来ない従業員。

「みんな逃げたな」と社長と二人。「俺も逃げたいです」とさらに心の叫び。そしてまた屋久島をつまみに、今度はマスターと二人、社長は酒が進む。

「何のむ」と酔ったマスターの問いに「ビールでいいです」と言うと「ビールがいいですだろ」と怒られて、社長のいびりに口出すと「お前は黙ってる。口出すなんてはえー。お前はそこに座ってるだけだ」と言われた。

俺は笑顔で領き、ひたすら呑むことだけしか許されない時間。こんな時間の流れて、遅い事、遅い事。そんな仕事で疲れているのに、さらに疲れる日々が多々あった。

5年という年月の間。

2年半が過ぎたくらいに一度辞めたいと思ったことがあったが、どうにか踏ん張れた。

ちようどその時、先輩達がたくさん辞め、残された自分達が会社を動かさないとイケない状況になり、その時から社長の気持ち、経営者の気持ちが分かるようになり、考えが変わった時でもあった。

今、人生を振り返ると、ほんととたくさん良い人に出会い、支えてもらい、頑張ってくれた。

今の自分があるのも、そんなみんなのおかげ、そして何よりも社長のおかげです。

たくさん怒られ、厳しかったけれど、それも自分を育て上げるための愛情であった。

現在、弊社にある車や花環も社長から譲ってもらったりして今でも気にかけてもらっている。今の自分の基盤になつていっているのは社長の教え。自分が跡取りでなければあのまま会社に残り社長と一緒に頑張っていたかった。

最後に、今まで育ててくれた両親、そしていろいろ指導してくれた社長、そして出会ってくれたみんなに伝えきれないほど感謝の気持ちを胸に、これからも一歩一歩歩んでいきます。

たくさん、たくさん、ありがとうございます。